

「宗教と現実とは切り分けられない」。特に9・11テロ以降、宗教と国際政治や安全保障の議論が不可分になっている。異宗教は「理解不可能」で、公の場に持ち出すべきでないとしてきた西欧の考え方が、立ち行かなくなっている。異宗教に対して無関心ではなく、正しい知識を持つことが求められる時代。日本では特に一神教への理解が不十分と感じるという。「宗教教育は感性ではなく知識の教育なのです」

自身、牧師。専門は比較宗教学論で、今、特に注目しているのが、「原理主義」という言葉だ。1979年にイランで起きたイスラム革命以後、アメリカがイスラム勢力を危険視する中で、「イスラム原理主義」という「レットル」がはられることになる。もともと「原理主義」(ファンダメンタリズム)は、1910年代のアメリカで、聖書を中心とする立場のキリスト教徒による自称だった。政治は世俗的として、政治とは距離を取っていた人たちだった。これまでの欧米型の「宗教間対話」は、話しやすい人同士の対話だった。しかし、「原理主義的な運動体をはじめ、対話拒否的な人たちが安心して語れる場を国際社会がどう作れるかが課題です」。そのためにも原理主義の正しい理解が必要と感じる。

小原さんのゼミ生の徳舛和祐さん(65)は3月、神戸市の高校を定年退職。4月から同大学の修士課程に在籍している。居合道6段、杖道5段という武道の経験と重ね合わせた研究テーマは「キリスト教の死生観と武士道の往生観との邂逅」。「人はいつ、どこで、どのように死ぬかわからない。美しく死ぬために、学びたくなった」

小原さんは「宗教・宗派を超えた学術交流」のため、今年度から単位互換制度が始まった「京都・宗教系大学院連合」の設立に奔走した。現在は同連合の事務局長。この制度を利用し、徳舛さんは佛光大大学院の「法然教学演習」にも出席している。

「問題が複雑化する現代、自分の宗教・宗派に完結せず、協力して対処する姿勢が必要だ」と小原さんは語る。(小林正典)



同志社大神学部・神学研究科は、京都市上京区今出川通烏丸東入ル。社会人入試などの問い合わせは、神学部・神学研究科事務室(075・2561・3333)へ。

国際社会の「宗教間対話」糸口探る